

卒論・修論のための自然地理学フィールド調査

泉 岳樹・松山 洋 著, 古今書院 発行

2017年10月1日, 126 pp. 定価3,200円(本体)

地理に関する情報を集めた「地理」という月刊誌がある。この雑誌の2013年11月号から2014年5月号にかけて、「自然地理学のフィールドワーク」というエッセイが掲載され、フィールド調査に基づいた研究を行いたい人にとって役立つ情報を提供してきた。そして今回、このエッセイに関連するコラムを追加した「自然地理学フィールド調査」という単行本が出版された。

本書は以下の様な構成になっている。

- 序章 卒論のテーマの選び方と、それに向けてのスケジュールリング
- 第1章 雪を調べる — 衛星リモートセンシングにおける地上検証データの取得
【コラム1】紙地図と電子地図を用いた積雪マッピング
【コラム2】山岳積雪調査
教訓：運と勤
- 第2章 植生を調べる — 森林の分光反射特性の観測
【コラム3】正規化植生指標 (NDVI) と葉面積指数 (LAI) の観測
教訓：諦めるなら現場で諦めたい
- 第3章 河川水を調べる — 水循環の推定
【コラム4】現場および大学での湧水の観測と分析
教訓：湯田温泉の「発見」
- 第4章 気象観測機器を設置する — 局地風の定点観測
【コラム5】「まつぼり風」に対する人々の意識
教訓：素敵なコネの作り方
- 第5章 湧水を調べる — 晴天時と大雨時に注目して
【コラム6】地下水流動シミュレーション
教訓：調査はみんな神頼み
- 第6章 空から見る — UAVによる災害・植生調査
【コラム7】UAVを用いた災害調査と、UAVを取り巻く現状
教訓：新しいツールを使いこなそう
- 第7章 風を調べる — 局地風の移動観測
【コラム8】風の移動観測と気象の数値シミュレーション
教訓：もう一つの「運と勤」

タイトルや序章に書かれているように、読者の主なター

<http://agrmet.jp/wordpress/wp-content/uploads/2018-C-1.pdf>

2018年1月10日掲載

Copyright 2018, The Society of Agricultural Meteorology of Japan

ゲットはこれから卒論・修論を書こうとしている皆さんである(私が卒論・修論生の時に本書が出版されていれば!)。序章では卒論を中心として、研究テーマの選び方や研究の進め方のポイントなどが書かれている。卒論・修論のテーマには自分の興味ある研究課題を選びたいものだが、「自分の研究がどこまで明らかになっているか?」をしっかり把握し、自分の研究のオリジナルティーを見つけることは、非常に苦勞する部分であろう。本書には、そんな研究課題の問題設定に関するアドバイスが書かれており大いに参考になる。研究の進め方については、研究室における3年~4年次のスケジュールが具体的に示されている。研究室によってカリキュラムの形態は様々だと思うが、それぞれの時期にどの程度研究を進めておくのが良いのか把握することができる。序章の後半部分では、卒論でフィールド調査を行った学生3名の研究を紹介している。卒論のスタートからゴールまでの間に様々な困難に直面しながらも、研究に精一杯取り組んで成果を挙げたエピソードは、同じ立場にある卒論生の励みになろう。第1章から第7章にかけては、積雪調査や植生調査、水質・湧水調査や気象観測、さらには近年注目を集めているUAV(Unmanned Aerial Vehicle, 無人航空機)を用いた災害調査など、自然地理学が対象とするフィールド調査の内容が網羅されている。各テーマが章ごとに独立して書かれているため、自分の特に関心のあるテーマから先に読み進めても良いだろう。本書は文章が分かり易く書かれていることはもちろん、調査の写真や図表も充実しているため、調査の様子がイメージし易く、初めて卒論を書く人にとってはどのような図表を書いたら良いかの参考にもなる。また、各章にはコラムが設けてあり、調査の方法や調査に用いた機器および結果の分析方法などについて、丁寧に解説されている。本書で説明しきれない部分は、文章中あるいは各章の末尾に引用文献としてまとめられているため、より詳しく知りたい人はすぐに文献をレビューできる。さらに、本書の末尾には索引が設けられているため、気になる用語を逆引きできる点も嬉しい。

このように、本書はフィールド調査を通して卒論あるいは修論を書こうとしている読者にとって、非常に心強い内容となっている。しかしながら、読み進めると、著者が調査に係る費用を工面するのに苦勞した話や、調査中に危うく車の事故を起こしそうになり肝を冷やした話、また、学生が自発的に研究を進めるよう如何に指導したかなど、教員としてフィールド調査に携る中での苦勞話や奮闘振りに関する記述が随所に書かれていることに気が付く。冒頭部分で、本書の主なターゲットは卒論生・修論生であると述べたが、実際には、卒論生・修論生の読者のみなら

ず、学生を指導する立場にある方々にとっても大いに参考になる一冊である。

また、本書のユニークな点として、各章にフィールド調査の教訓が書かれていることが挙げられる。ここで書かれている教訓は、著者自身がフィールド調査を通して実感した「調査を成功させる秘訣」のようなものである。調査には常に「運と勘」が必要なことや、様々な制約のある現地で計画通りに観測を行うためには「コネの作り方」が重要であること、観測はワンチャンスであることなど、ついつい頷いてしまうことばかりである。フィールド調査の経験がある人であれば、現地調査において想定外な問題に直面し苦労したことが多々あると思われる。そして多くの場合、そのような経験を通して、フィールド調査において生

じる様々な問題を解決あるいは回避するノウハウがひとつひとつ培われていくものである。本書に書かれた教訓は、そんな皆さんのノウハウ作りの助けになるであろうし、本書を読むことによって事前にフィールド調査のノウハウを把握していれば、調査が成功する確率もグンと高くなる。

本書はB5サイズであり、手に取ってみると非常に軽量である。持ち歩いていても重くなく、バックなどに入れても嵩張らない。そのため、教材として机に置くことはもちろん、通勤・通学時の合間にサッと読むことができ、隙間時間の有効活用にも打って付けの本である。

(農業・食品産業技術総合研究機構果樹茶業研究部門
紺野祥平)